

1. 誰にも邪魔されない早朝から仕事をするのが彼のスタイルだ 2. 小さい子どもだけでなく、大人でも楽しめる作品の数々 3. ロックバンドTHE SPAM69のパフォーマー&ヴォーカルという別の顔も持つ 4. イベントのワークショップで子どもたちと楽しむことは彼にとって大切な時間となっている 5. 6. 2017年に行われた企画展「ことばらんどでたからさがし!」には大勢の子どもたちが訪れた



特集 2 絵本作家 中垣 ゆたか

作品作りも音楽も自分らしく、自由でいたい。

繊細でカラフルな独特のタッチで数々の絵本やイラストを手掛ける中垣ゆたかさん。
作家として充実した制作活動を送りながら、音楽活動や趣味のスポーツも満喫する日々。
しかし、そんな彼も決して順調に作家になれた訳ではなかった。

中垣ゆたか 1977年福岡県小倉生まれ、町田市在住、B型。2005年イラスト制作活動を始める。著者に『ぎょうれつ』（偕成社）、『よーい、ドン!』（ほろぶ出版）、『UFOのつくりかた』（偕成社）、『資料寄託記念 中垣ゆたかミニ展示コーナー』 2018年3月20日(火)～4月8日(日)10時～17時 月曜休館 町田市民文学館ことばらんど1階文学サロン 観覧無料

『タロとチーコのみみつのだいぼうけん』（小学館）、『エーくんピーくんのなんでもつくります!』（偕成社）、『にんじゃなんにんじゃ』（赤ちゃんとママ社）

元々、絵を描くことが大好きだった訳でも得意だった訳でもなかった。基礎知識は軽く書物で読んだだけ。影響を受けた作家も特いない。「強いて言えば手塚治虫が大好きで、『ドラえもん』も全巻持つていて。アメコミは今でも大好きです。」そう語る彼は、のめり込むととことんやり尽くす、極端なタイプなのだという。

軽い気持ちと自身を取り巻く環境がこの世界に彼を誘った。幼い頃から身体が弱く、大学在学中に原因不明の大病で生死の狭間を彷徨った。就職氷河期で就職できず、「じゃあ、イラストでも描くか」と、雑誌の編集部でイラストを持ち込んだ。しかし、そんなに甘い世界ではなく、どこへ行つても頭ごなしに怒られた。「汚い」「捨てる」と言われたことも。ただ、中にはその絵を伸ばすよう助言してくれた人もいた。

自分の絵にこだわりもなく、言われるがままに描き続けた半年間。そんなある日、音楽雑誌にイラストの掲載が決まる。数カ月後には4コマ漫画の連載も始め、2007年に初の個展、2010年に玄光社の誌上コンペで1600点の応募作品の中から見事入選を果たす。今では絵本や冊子の表紙、CD

のジャケットなどを手掛けている。2017年は5冊の絵本を出版。代表作『ぎょうれつ』（偕成社）は海外でも出版された。月刊誌キンダーブックの表紙も3シーズン目に入り、町田市民文学館では初の企画展も開催された。

「絵本は出版社からの依頼があつて、編集の方と議論を重ねて一緒に作り上げるという感じですが。昔、出版社にイラストを持ち込んだ時のトラウマで、いまだに自分から企画を持ち込めません(笑)。今の仕事は僕のスタイルに合っていて、とても充実しています。病気で死にかけたことがあるから、生きていくうちに思いっきり好きなことをやらなくちゃ、ってどこかで思っているのかも。」

2017年、町田市のふるさと納税の返礼品になった絵も予定の10品があつたという間になくなるほどの人気を博した。3年前からは「まちびと」でもイラストを担当し、今では町田を代表する絵本作家の一人だ。

「やってみたいことはアニメや企業とのコラボ。ただ、町田の仕事はずっと続けたい。」
自由なアーティストの頭の中には町田愛と夢がぎゅーと詰まっています。

協力 町田市民文学館ことばらんど